

# 3) 資料収集・修理・復元事業

幸喜 淳<sup>1</sup>・宮城奈々<sup>1</sup>・佐久本 純<sup>1</sup>・鶴田 大<sup>1</sup>  
中野稚里<sup>1</sup>・高嶺瑞貴<sup>1</sup>

キーワード：毛長禧 花鳥図 解体修理 玉御冠 カラーフィル 尚育王 糸掛け型紙

## 1. はじめに

首里城公園の魅力、満足度向上を目的に、県内外、国外に散逸する首里城関連資料の保存を目的に資料収集を行っている。令和5年度は絵画資料、金工品、漆芸品3件の資料収集を行った。

また首里城火災による被災した資料について、陶器、漆器の修理、染織品の複製を行った。また経年劣化による絵画資料の修理を実施した。

## 2. 資料収集

首里城公園や財団受託施設等の展示に資するため、首里城基金を活用して、琉球王国崩壊から去る大戦までの社会的な変動などによって散逸した琉球関係資料、文化財の収集を行っている。

令和5年度は、令和3年度の収集委員会での委員からの意見を踏まえ、財団内部で検討を実施し、所有者と調整を行い、絵画1件、金工1件、漆芸1件、合計3件4点を収集した。

### 1) 収集した絵画資料、金工資料について

#### (1) 「琉球国之図」

「琉球国之図」(写真-1)は、1796年に製作されたと考えられる彩色地図で、「薩摩藩調整図」や沖縄県立博物館・美術館所蔵の「琉球国之図」との関連性も指摘される貴重な資料である。非常に緻密な記述も見られ、今後詳細な調査を実施する。



写真-1 「琉球国之図」

#### (2) 「金時計」

「金時計」(写真-2)は、本島北部宜名真集落で起こったイギリス船の沈没事故に際し、地元民による乗組員救出活動、死亡者の丁重な埋葬などを受け、

イギリス政府から琉球国王へ贈られたことが刻印されている(写真-3)。王国末期の外国との交流が分かる貴重な資料である。



写真-2 「金時計」表面



写真-3 「金時計」裏面

## 3. 修理

### 1) 絵画

本事業は当財団所蔵の毛長禧筆『花鳥図(牡丹尾長鳥図)』および孫杖(そんてい)筆『山茶華図』の修理業務である。

#### (1) 毛長禧筆『花鳥図(牡丹尾長鳥図)』

作者である毛長禧(佐渡山安健 1806-1865)は首里王府の代表的な絵師で、尚育王御後絵を描いたことが史料から知られる。修理にかかる調査では、首里城火災に起因する損傷は確認されなかったが、著しい経年劣化が確認され、剥落が懸念された濃彩部分の補強や折れ・欠損の補修がなされた。解体に際して過去の表装裂変更が確認されたため、表装裂もそれまでの侘茶的な質素な裂地(絨)から宮廷絵画にふさわしい精緻かつ優美な緞子裂に変更され、作品の魅力が十全に味わえるようになった。次年度も毛長禧の作品の修繕が予定されており、これまでに修繕・

<sup>1</sup> 琉球文化財研究室

調査した「闘鶏図」2点も併せて、毛長禧作品群の技法・筆致の特徴・分類の研究を進めるデータが整いつつある（写真-4）。



写真-4 毛長禧の画風・技法について討議しつつ、表装裂の検討をおこなった。(京都・墨仙堂)

## (2) 孫杖(そんてい)筆『山茶華図』

孫杖は17世紀の福建派の画家だが事跡の詳細は知られていない。本作品は首里城火災により軸木の重り（鉛）が膨張、本紙・裂地に損傷を与えており修繕が急がれていた。解体により本紙の絹本の硬化は認められなかったため、本紙の動きが少ない額装にせず、原装通り掛軸装とし、裂地は新調した。今後の経過観察および絹地の状態の詳細な科学調査が必要である。孫杖と琉球の交流についても、同時代の福建派の孫億との関わりも含め、展示を見据えての調査が必要となる。

## 2) 陶磁器

昨年度に引き続き被災収蔵品である陶磁器5件の修理を実施した。修理方法は一般に知られる金継技法でなく、近代以降に英国で発達した文化財陶磁器修理技法であるカラーフィル技法によった。修理は当該技法の第一人者である佐野智恵子氏（工房いにしへ）が行った（写真-5）。カラーフィル技法の利点として①欠損部分の接合面の調整（削り）を最小限にできる②金継ぎ技法と異なり接合部位が目立たず、自然な色合わせができる③エポキシ樹脂による接合の為、溶剤による分離が容易であり、数十年毎の経年修理の際に資料本体へのダメージが少ない、などが挙げられ、今後の文化財陶磁器修理方法の主流になると考えられる。

今回の修理では(1)水盤、(2)多聞天立像、(3)焼締四耳壺、(4)白水盆、(5)琉球色々盃[8点]の5件について修理が行われた。(1)については30kgを超える重量ということもあり、今年度は微細な破片を10点の破片にまとめるに留めることとなった。破片接合は次年度に実施し、併せて移動用の台座・箱を誂える。これは被災資料・脆弱資料の保管・移動・展示の方法を検討する好機となる。(2)は当初破損のみられなかった立像の脚部がその後折れるなど、火災による脆弱化が特に現れた資料であり、脚部の

補強が重点的に行われた。今後は横臥した状態での保管・展示などを検討している。(3)(4)(5)については損傷は比較的軽微であり、通常の洗浄・接合・補彩が実施された。

当初は「熱に強い」と考えられた陶磁器類も、急速な熱変化には弱かったことが火災後の経過や修理業務によって確認されたのがこの数年間だったといえる。被災陶磁器資料については、通常と異なる保管方法（収納箱の工夫）、展示方法（誂えの収納箱を活用した展示、支柱などを用いた展示など）を検討すべきであり、今後1点1点について個別に検討することになる。次年度以降も陶磁器修理事業は続くが、これまでの知見を活かした有効な修理事業を行ってきたい。

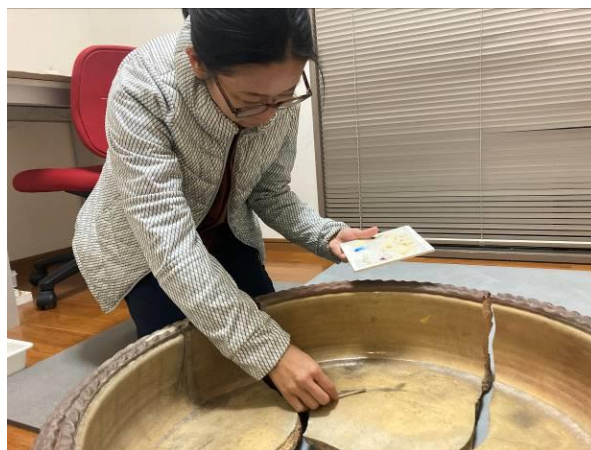


写真-5 カラーフィル作業：修繕品の本体をエポキシ樹脂で接合。透明の色材に基本の色合い・質感を整えた樹脂を、接合部分に最小限の添付をおこなう。

## 3) 漆器

火災の影響を受けた漆器の修理は、日本国内での漆工文化財の修理においては前例が無い為、多角的に検討しながら修理処置をしている。漆工品の修理実績のある室瀬和美氏監修のもと松本達弥氏を技術指導として業務委託し、琉球漆工藝舎と株式会社目白漆芸文化財研究所（以下「目白漆芸文化財研究所」と称する）のそれぞれの技術者と連携しながら修理を進めている（写真-6）。

### (1) 琉球漆工藝舎による修理

琉球漆工藝舎には6件の修理業務を委託した。資料全般の修理においては、クリーニング、接着、損傷部の補填、漆塗膜の補強を行なった。被災資料には、火災の影響により滲出したと考えられる物質が斑点状のシミとなって塗膜表面に現れる症状がしばしば確認された。このシミの除去に対して有機溶剤、精製水、エタノール水溶液、重曹水の洗浄を試したところ、重曹水には一定の効果が見られた。これらのことから、塗膜表面の付着物は油脂を含む物質と考えられる。クリーニング後、漆固めによる塗膜補強を試みたが、通常の数値に比べて漆の硬化が遅かった。要因として、塗膜の油分が充分に取り除けていない、もしくは、漆を希釈している溶剤が塗膜に作用して硬化が遅くなったと考えられる。クリ



ーニングについては物理的に除去する方法も、技術指導の松本達弥氏、各工房の担当者と協議した上で決定していく必要がある。

## (2) 目白漆芸文化財研究所による修理

目白漆芸文化財研究所には9件の修理業務を委託した。うち1件は沖縄県指定文化財である。資料全般の修理においては、クリーニング、接着、損傷部の補填、漆塗膜の補強を行なった。火災の影響による斑点状のシミのような跡が見られた。県指定文化財『黒漆牡丹七宝繫沈金食籠』では欠損部ではあるが、資料の構造を観察できる部分が3箇所見受けられた。協議の結果、その3箇所については現状のまま保存することとし、膠を含侵させて補強する処置に留めた。『黒漆花鳥密陀絵漆絵盆』は、密陀絵に付着した紙繊維を除去した箇所は油分が失われ、白く艶が引けたような状態であった。当該箇所は精製水で希釈した膠を塗布し保護を行った。



写真-6 各修理技術者と技術指導者による修理検討の様子

## 4. 復元

### 1) 玉御冠

琉球国の儀礼用の王冠である玉御冠(タマンチャープイ)は、那覇市歴史博物館が原資料を所蔵している。当財団が復元した玉御冠は首里城火災で焼失したため、令和3年(2021)年度から再度の復元製作を進め、今年度に完成の運びとなった。

初年度以降、全体の工程を確認後、各部材の製作を専門工房に依頼し、今年度はそれらの部材を王冠に組み上げる作業となった。

各部材の製作工房を統括したのは(株)龍村美術織物で、これまでも複数回、玉御冠の復元製作を手掛けており、当初は難しかった部材の入手や、復元技法を解明しつつある事業者である。このため玉・ガラス・金属・布地などの入手、その成形、組み立て作業はスムーズに進んだ。

昨年度までに王冠の胎(≒本体の形状)の製作が進められ、今年度は胎の木型に合わせて藤網を作成し、そこに藤筋を成形し、漆・鉛白・金泥で内側の仕上げ作業へ進んだ。表面のほうは布地(縮緬)を黒色に染め、それを胎に張り付け、裾部分の成形・ピロード縫製を行った。金糸刺繍は和紙の上に成形糊付け

を施し、押さえ糸でしつけを行ったのち、胎へ仮貼りした。玉類の胎への取り付けは詳細な設計図を作成してのち、作業を進めた(写真-7)。

複雑な曲面をもつ胎への金糸刺繍と玉の取り付けは、王冠の全体の姿に決定的な作業工程であり、慎重に進められた。これまでの復元製作の経験から金糸刺繍を王冠の胎の曲面に添わせる技法も精度を増した。また色調や質感・造形性が一層、原資料に接近した玉類が取り付けられると、王冠には威厳が漂った。飾り金具・紐類が取り付けられ、玉御冠の完成をみた。

復元製作の過程を通して得られた知見や、製作過程の記録(画像・映像)は、今後、展示などを通して多くの人々に玉御冠を実見していただき、往時の儀礼空間を体感していただける、重要な資料となる。



写真-7 柿元寛氏による玉類の取り付け

### 2) 書跡

昨年度に続き、首里城火災で焼失した尚育王(1813-1847)の書跡復元を行った。尚育王は歴代の琉球国王の中でも能書としてとりわけ名高い。昨年度に続き、書家・幸喜洋人氏が製作を担当した。幸喜洋人氏は県内の主な機関・収集家所蔵の尚育王の書跡の調査を年来実施しており、また中国・琉球の書道史に通暁し、復元製作に最もふさわしい書家といえる。

昨年度は尚育王書跡の対句「地静春逾好。人間日更遅」が復元製作されたが、対句の書跡は一字毎の放ち書きであり、書風も手習い的で比較的、容易な面があった。今年度の七言絶句「紫禁仙輿詰旦來。青旗遙倚望春台。不知庭霰今朝落。疑是林花昨夜開。」は連綿書きを含む鄭嘉訓流の書跡であり、難易度が高まった。復元製作の技法は、基本は伝統的な双鉤填墨である。しかしこの技法は造形を忠実に写す拓本には好適だが、筆勢もみえる復元製作においてはそのまま用いることはできない。透き写し用の薄紙を使うこともできない。臨模技法も交え、筆勢を写す技法が必要となる。

本紙については原本の焼失前の記録から純本(絹の一種。ヌメ)と判明しており、画像を元に最も近い純本の生地を台湾にて入手した。原本に近づきうる古墨(松煙墨)・筆を慎重に選び、原寸大の画像によって臨書を繰り返して字形や要所を確認・記憶し

た。紬本の本紙に裏打ちを施し、その端切れで墨・筆・本紙の相性を確認すべく練習を繰り返した。その後、透過光台に原寸大画像を配置し、本紙を重ね、さらに臨模用に、傍らに原寸大画像を置くという準備を行った。墨色の不変に留意し、水滴で少量ずつ水を足しつつ、墨を磨り、揮毫を進めた（写真-8）。原本を揮毫した尚育王自身は一気呵成に仕上げたのであり墨色は一貫しており、それを長時間かけて復元揮毫していくため困難を極める作業であった。

紬本の本紙3枚目にして、やっと納得のいく復元作品が仕上がった。有識者ヒアリングを経て、復元製作として正式に納品がなされた。



写真-8 練習風景。透過光台上の原寸画像に本紙を重ね、さらに傍らに原寸画像を並べて復元揮毫を進めた。

### 3) 染織

本業務は首里城火災の高熱によって被災した染織資料の複製業務「被災展示品複製品製作業務」である。今年度の実施概要を下記に報告する。

#### (1) 複製の製作体制（敬称略）

絹白地紹織布製作：手織り工房ら・桑子/山城有希子  
\* 令和4年度完成

型紙製作：古紅型研究会 群星/代表 渡名喜はるみ  
監修・渡名喜はるみ

型彫り・国吉春香氏、平田美奈子氏

資料作成・宮城愛美氏、上地菜々美氏、  
国吉春香氏

#### (2) 今年度の業務内容

今年度は、原資料「紹織染分地鶴に松梅菊両面紅型胴衣」（写真-9）のトレース、類似型紙資料（沖縄県立芸術大学芸術 附属図書・芸術資料館所蔵 鎌倉芳太郎資料）の熟覧調査、糸掛け型紙試作と本製作製作を実施した。

#### (3) 今年度の複製スケジュール

- 4月：図案のトレース、型紙の試作
- 5月：鎌倉芳太郎資料の型紙資料を熟覧調査（写真-10）
- 6月：糸掛けの試作
- 7月：糸掛けの試作、型紙の試し彫り（写真-11）
- 8月：糊置き実験、型紙に柿渋を塗布、図案再トレース
- 9月：トレースの確認、型彫り前の微調整・最終確認
- 10月：型紙の摩耗実験
- 11月：型紙をマイクロスコップで撮影
- 12月：型紙の摩耗実験
- 1月：型紙の糸掛け張り（写真-12）と柿渋塗布（写真-13）
- 2月：糸掛け型紙、報告書、画像データを納品

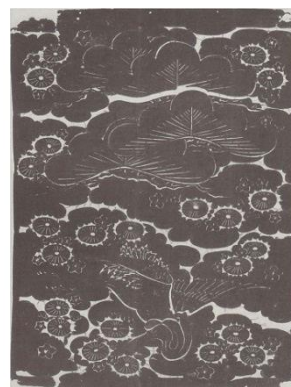
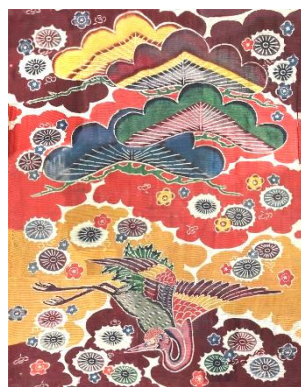


写真-9 原資料の部分写真 写真-10 鎌倉芳太郎資料の型紙



写真-11 型紙の彫り



写真-12 型紙を彫った部分を糸掛け（絹糸で縫う）



写真-13 型紙に柿渋を塗る

## 5. 外部評価委員会コメント

時間や予算を要する重要な継続事業。委員会での事業計画に沿いつつ、修理業務で得られた知見をもとに臨機応変な計画変更ができています。修理業務での人材育成を具体的に進めてほしい。（宮里顧問：元浦添市美術館館長）